

曇曠と法華經疏

平井 宥慶

曇曠の『大乗二十二問本』第十八問は、三乗が方便か究竟か二乗は皆得成仏か不成仏かを問う。その答で、三乗は五姓の中の不定性人のため説かれたが、皆有仏性論からいえば悉皆成仏であるから唯一性のみ立てられ、それは真如に順ずる故に一乗正法を立つとされ、五姓差別は方便説であるが、一乗にも方便と真実があり、『解深密經』で一乗が權教不了義門とするは龜淺近縁に説かれた方便説で、皆有仏性論からは究竟は一乗のみであり、『法華經』の説く一乗はこの真実一乗と結論する。⁽³⁾これは深密經の見解を方便説で会通しているようにも解されるが、五姓各別説をとらない点で曇曠は深密經の所説が至上だとはみていないといえよう。曇曠の修学が多面なことは既に知られている。⁽³⁾しかしその修学態度は正統的学風をそのままには必ずしも承けるとは限らないなどの傾向を露呈する。基本的には窺基系唯識を學んだとみられる彼が、ここでは五姓各別説を主張しないなどその意味から留意すべきであり、さらにここで注目すべきは法華一乗論を積極

的に論じていることである。二十二問本の思想背景として主要なものは唯識と起信論の思想であるが、この条では法華一乗思想が皆有仏性論と関連して論じられる。尤も一乗思想と『法華經』の關係自体には不思議はないが、曇曠の修学経路を考えると、『法華經』がいかに修学されどこで学習されたかは、中原仏教との触れ合いという点からも、明瞭にさるべきであろう。曇曠には『維摩經』疏も存したごとくである。⁽³⁾同様に盛行した法華經の修学状況の解明は、当時の中原仏教思想界の様態をも、より明確にするにちがいない。まず最初に敦煌文献中に存する法華經疏類の分布形態を検討しよう。

I 識語表題の明瞭なもの

- (1) 法華經玄贊二十卷 窺基撰(大正三四・六五一a~八五四b)
- (イ) S. 一五八九(G. 五六〇五)―七八四^c、七八六^終b。(ロ) S. 二四六五(G. 五六一一)―六五一b、六六〇b。(ハ) S. 三七一三V.(G. 五六〇二)―「妙法蓮華經玄贊序品第一」表題のみ。(ニ) P.ch. 二一一八V.―「法華玄贊卷第十」のみ。(ホ) P.ch. 二二五九V.―「妙法

蓮華經玄贊科文卷第二 燕臺憫忠寺沙門詮明科定。(イ)二一七六―七七七^cと七七八^a。(ハ)三八三二卷頭と六七一^a。(チ)66号と六五六^aと六五八^b。(リ)結43―六六四^cと六六七^c。(ヌ)68―六七三^bと六九四^b。(ヘ)黄12―七二〇^bと七三四^a。(コ)河39―七一六^cと七二〇^c。(カ)BN本ch.二二五r.―七六一^cと七六二^b。(キ)私藏本総目索引7八二・七八九・七九〇・七九一・九一四・九二一。

法華玄贊は窺基(632―682)が博陵(河北省定県)に滞在していたときの撰であるが、その述年は定かでない。しかしその最上限は七世紀中葉以前ではないと思われ、敦煌に入つた(書写)のは敦煌写本の時代区分からいえば中期以降のこととなる。この中(イ)は玄贊の科文を写し証明なる沙門名を出だす。燕台が今の北京とすればその法源寺・唐代の憫忠寺をいうか。義天録の窺基述玄贊の次項に「会古通今鈔十巻 科四科大科一巻 已上証明述」とあり、これをいうか。義天録には証明が四回見出され、しかもそのすべてに科文を述す。学风は唯識系のように、金剛經の条で道蘊の宣演に科文二巻を撰するのは興味深い。曇曠は道蘊と関係深く、もし証明科定本がこの証明と同一ならば、この写本が敦煌に入つた経路として曇曠との関連性が考えられてくる。(二)も題名のみ。尾題らしいが詳細は不明。丁寧な字体。(イ)も題名のみで数行分あけて金剛經疏巻下なる文がある。紙表は大寶積經。達者と

はいえぬ字体で習字の手習いのような写本。(ヌ)は尾題「法華經玄贊第二」がある。(ロ)も尾題(第四)あり。大正藏經本は各巻本末に巻するが、それがないのに留意したい。(ヌ)は界線があり各行23字前後に肉太の字でつめて書き「早書きのややくだけた書体」。(リ)には写真でみる限り界線はないようだが行間は下敷を使ったようにきちんと揃い、くずし字も散見できるが全体としては丁寧に書かれ「早書きの楷書」の様である。(ハ)は(ロ)と同じ筆蹟と認められ同写本の一部ではないか。草書体の典型は(ロ)(ハ)で、(ロ)はG目録に淡黄色紙とあり、(ハ)は目録に灰褐色という、両者とも比較的上質のもののようにある。(ハ)は巻頭に「法華經玄贊卷第一」寺沙門基撰」とあり、少なくとも(ロ)とは違う写本である。(イ)(チ)は堅い筆法だが正書とはいえず、三本とも筆蹟は一致しない。(イ)はG目録に白っぽい紙とあり、堅い筆法はペン類によるのかもしれない、後期写本に属するかもしれない。以上からみるに多くの書体あり、時代と人と広範にわたり書写されていたごとくである。他の疏に比して玄贊の写本の多いことは、敦煌における法華經學習の一指針を示しているのかもしれない。なお玄贊のチベットの訳があるとされる。これは敦煌本の面からも論ぜられるべきであろう。

(2)法華經論二巻或は一巻 世親釈(大正二六・一a―一〇b、一二〇b)。S二五〇四(G五六〇)尾題「法華論一巻」―一

○C²¹尾完。法華論には二巻本と一巻本が伝存するがこの伝
訳史は複雑であり、五〇八―五三〇年頃の訳出という。帰敬
偈と依義撰三の有無、並びに分巻が相違する他はほぼ全同と
いう。当写本は一巻本で依義撰三を欠き、現存一巻本に一致
する。G目録にやや薄い白つばい良質紙とあり、七世紀初期
とみている。写真でみる限り界線があるようで各行20―22字
前後に書かれ、写経であればこの時期は「端正な楷書」が多
いが、論書のためか「ややくだけた書体」でわずかに右上り
の運筆はなれた手を思わせる。字句の加筆訂正がみられ学習
が共なつたことか。法華論は玄賛に多大の影響を与えたこと
を考慮すれば、この写本の発現があつても当然のようだが、
玄賛写本と当本の敦煌入路時期は問題である。両者がほぼ同
時の場合はともかく、大はばにずれる場合はどちらが先かが
問題である。当本と類同の筆蹟をもつ玄賛写本はない。当写
本の成立が七世紀より少し早いという可能性も考えて、玄賛
写本とは違う経路も考えられる。

(3) 法華經義疏開題并玄義十門 吉藏法師撰 S六八九一 (G
五五九九)。首部が破損しこれは尾題。吉藏(五四九―六二三)
の法華研究は「法華宗と称してもよいほど」といわれ、法華
玄論十巻・法華義疏十二巻・法華遊意一卷・法華論疏三巻・
法華統略六巻が現存し、この順序で撰述されたと想定され
る。また観世音經贊一卷・法華經新撰六巻・法華經玄談・法

華經科文二巻・法華中疏七巻が目録にみられるが定かでない。表題と同一のものはないが、検討の結果、法華遊意とだ
いたい類似することが判明した。相違はその記述順序であ
る。大正藏經は鎌倉時代の写本を原本に建長四(一二五二)
年本を校訂本にして収載するが、それでは開題序に続いて
「一來意門二宗旨門三釈名題門四弁教意門五顯密門六三一門
七功用門八弘經門九部党門十緣起門」の十門に分別す。当本
では「一弁經來意二解釈題名三明經宗旨四釈教所撰五顯密一
三六弁經功能七弘經模軌八翻訳前後九部類不同十品次差別」
とある。文言章句を比較すれば、はなはだ近似するが、記述
順序の相違は著しい。G目録には、柔かい纖維質の白つばい
紙に草書体の写本で七世紀とす。界線のある紙で草書体とい
つても一字一字は読易い。G五五九七(S六七八九)を参照の
こととするので、これをみるに、薄い纖維質の白つばい紙で
草書体の七世紀写本とし、確かに類似し、尾題に「吉藏法師
撰 道義續(纂)集」とあり、「法花經義疏」の名あり。写
真の22コマ目に「葉草喩品第五 四門分別 一解來意二釈品
名三問答決疑四随文解釈」とあり、同様の形式にS四一三六
(G五五九八)がある。この2コマ目に「法花經義疏化城喩品
第七四門分別」以下同右とあり、両写本は同一疏本の一部分
であろう。ただ、後者は淡黄色紙とされ、筆蹟もあまり似な
い別人の書写か。これらと全同の吉藏法華疏は現存中に見出

せないが、強いていえば『法華義疏』に類似する文言章句を見出す。恐らく関連をもつのであろうが、相違はいかなる理由か。道義なる者の再編集というごとき意か。宋高僧伝巻二一に唐五台山清涼寺道義伝があり、彼は開元中台山に至り大曆元（七六六）年まで存したが寂年不明。この人物があるいは敦煌近隣の僧か。ともかくどのような形であれ吉藏疏が敦煌には伝えられていたとすると、法華論の伝播もこれとの関係が考えられてこよう。吉藏疏の学流伝播をも考慮しよう。

(4) 法華義記（巻第三） 大正八五・一七〇a～一七九c。

(イ) S二七三三（G五六〇六）——一七〇a～一七六c（葉草喻品後半・持品・完）。大正藏所収本。

(ロ) S四一〇二（G五六〇〇）——一七二a～一七九c（化城喻品後部・從地踊出品・完）。大正藏所収本。

(ハ) ch.三三〇八（方便品後半の偈の解釈（尾題「法華義記第一巻」））。

(イ) の奥書「比丘惠業許 正始五年五月十日釈道周所集在中原広徳寺写訖」の正始五年は北魏A.D.五〇八年、書体は「格別に丁寧に書いてある」。比丘惠業許とは惠業なる比丘が伝写を許可されたということか。釈道周所集はある人の撰述を道周なる釈子が再編したともとれる。広徳寺は統高僧伝巻六に魏洛下広徳寺釈法貞伝とある広徳寺か。しかしこれに合う惠業も道周も不明。(ロ) の奥書は「法華義記第三 比丘法順写記

也」。法順の名は華嚴宗の杜順（五五七～六四〇）で知られるがそうであろうか。写本の年代はG目録では六世初期とし、杜順の活躍時代がほぼ隋代とすると妥当しない。仏祖統紀巻三八に那連耶舎が天保七（五五六）年北齊の鄴に入つて翻訳を始めた際、監掌した中に法順という名を伝えるが、統高僧伝の同伝にはその名がみえず。同二六巻の慧藏伝中に出だす法順は延興寺で涅槃学を修したようである。どれも決しかねる。(ハ) の奥書は「利都法師釈之 比丘曇延許 丙辰歳用紙卅張 大統二年歳次丙辰六月庚戌三日水酉写此法華義記一部願令此福逮及含生有識之類齊悟一実無二之理」。(イ) が(ロ) と同疏とは必ずしも確定しないが、表題が同じなので検討する。大統二年は西魏A.D.五三六年。利都法師は撰者らしいが未詳。曇延は涅槃学の曇延（五一六～五八八）が知られるが、彼は東魏の鄴で活躍したようで、写本の西魏年号とはどのようにに相応するか。大統二年に彼は20才前後で入寺が16才頃とすると、伝写の可能性は否定できないが、この頃西魏にあつたのか。不明の点が多い。

(5) 妙法花經明決要述巻第四（尾題）P.ch.二二一八R。

裏面に法華玄贊の表題。草書体で一行二五～六字前後に書かれた40コマの写本。この題の疏は類似も含めて未伝。

(6) 観音経一卷 金藏剛菩薩注釈（尾題）④雨51 金藏剛は却余録のいうごとく金剛藏であろう。東域伝燈目録に「註普門

品一卷 金剛藏菩薩註」とある。⁽³⁸⁾ 確かに。ここでは劉虬註と惠遠疏の間にあり初期のものか。これとすれば逸書の発見である。観音經の疏としてch.三九〇四は首題「注觀世音經并序愚道微内外注之」、尾題「注觀世音經一卷」。縦に細長い折本で序文と經文は各頁四行取り、注文は割注で八行取り、木筆本文双鉤注単鉤。⁽³⁹⁾ この写本形式は八・九世紀に現れるといふ。

Ⅱ表題のないもの

- (A) 經疏 S 一一三V、S 二四三九、S 二四六三、S 四一〇七、S 六四九四、㊦暑70、玉26、菜11、淡32、始53、致15、制49、
(B) 抄・問答 S 一三五八V、S 二六六二、S 四二九八、P.ch.二
三四六、(C) 不明 S 五八四九。

- 1 大正八五・一一八九b。 2 上山大峻「曇曠と敦煌の仏教學」東方學報35。 3 拙論「道氣と曇曠の唯識學」大正大學研究紀要61。 4 拙論「曇曠の修道論」仏教の実践修道篇。 5 上山大峻「八・九世紀敦煌における『維摩經』諸註釈の系譜」竜大論集387。 6 ㊦法四八も総目索引に指示されるが規余録と写真に該当なし。 7 Gerhard Schnitz-Thomas Thilo in Zusammenarbeit mit Tajima Inokuchi; Katalog Chinesischer Buddhistischer Textfragmente (Band 1), 8 M. 目錄にも全く無とはいえない。 9 大正三四・八五四a。 10 藤枝晃(一)「敦煌写本の編年研究」學術月報24—12。 11 常盤大定編『中國文化

- 史蹟」12卷24頁。 12 大正五五・一一六八c。 13 拙論「敦煌本道氣集『御注金剛經宣演』考」印仏研22—1。 14 大正五五・一一七〇c。 15 拙論「道氣と曇曠」印仏研24—1。 16 藤枝晃(二)「敦煌寫經の字すがた」墨美97号37頁。 17 藤枝晃(三)「北朝寫經の字すがた」墨美119号11頁。 18 藤枝晃前掲(二)論文15頁。 19 藤枝晃前掲(一)論文。 20 矢吹慶輝「鳴沙余韻解説」21 勝呂信静「インドにおける法華經の註釈的解釈」法華經の成立と展開三七九頁。 22 横超慧日編著「法華思想」二一三頁。 23 藤枝晃前掲(一)論文。 24 藤枝晃前掲(三)論文。 25 勝呂信静「窺基の法華玄贊における法華經解釈」法華經の中國的展開三四四頁。 26 横超慧日前掲書二五七頁。 27 平井俊栄『中國般若思想史研究』三五八頁。 28 丸山孝雄「近代日本における中国法華教學の研究」近代日本の法華仏教五三二頁。 29 藤枝晃前掲(三)論文13頁。 30 藤枝晃(四)「北朝における『勝鬘經』の伝承」東方學報40冊三三九頁。 31 大正四九・三五七c。 32 同前六七二a。 33 布施浩岳「涅槃宗の研究」後篇四三九頁。 34 総目索引による。藤枝博士は40紙(前掲四論文三四四頁)。 35 布施浩岳前掲書四三四頁。 36 大正五〇・四八八a。 37 釈疏題に嚴密性は求められないごとくである(藤枝晃前掲四論文三四四頁)。 38 大正五五・一一四八c。 39 井ノ口目錄七頁。 40 藤枝晃前掲(二)論文34頁。
* 当論は未完である。特にⅡ項に対する論述の枚数が尽きてしまった。別の機会に論ずる予定である。